

**2(2) その他, 特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果, 世界的位
置付けなど。(評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容)**

特筆すべき教育活動

- ・学部教育では、第一セメスターに少人数教育を主眼とした「現代における農と農学」や、フィールド科学に実際にふれる「陸圏環境コミュニケーション論」、「水圏環境コミュニケーション論」など新カリキュラムを開設し、農学の基礎教育を充実させた。
- ・平成 20 年度の未卒業者は 20%と、15 年度の 16%を上回ったが、休学者や成績不良者に対する支援制度は整備・継続している。
- ・大学院では、平成 20 年度の学生による原著論文発表数が 109 報と高い水準にある。
- ・平成 20 年度の学生による国際学会での発表件数が 58 件と、平成 15 年度の 38 件に比べ 1.5 倍以上に及んでいる。
- ・平成20年度の J S P S 特別研究員への採用は22名と、15年度の9名を上回っている。
- ・学生の受賞数も35件に及んでいる。学位授与率は修士92%、博士64%と高い水準にある。

特筆すべき研究活動

- ・平成 20 年度の原著論文や著書などの公表数は 400 と、15 年度の総数 306 の 1.3 倍以上に及んでいる。
- ・特に英文の原著論文は 320 報を超え、国際的に評価の高い雑誌への公表も数多くある。
- ・主な雑誌は次の通りで、雑誌名のあとに 2008 年のインパクトファクター (IF) を記載した。

Nat. Med. (IF27.5), Angew. Chem. Int. (IF10.8), Curr. Biol. (IF10.7), JACS (IF8.0), Plant J. (IF6.4), Plant Physiol. (IF6.1), J. Immunol. (IF6.0), J. Biol. Chem. (IF5.5), Autophagy (IF5.4), Mol. Ecol. (IF5.3), New Phytol. (IF5.1), Org. Lett. (IF5.1).
--
- これら以外にも、IF が 3.0 以上の雑誌が約 35 種類にも及び、本研究科の高い研究活動を示している。
- ・平成 20 年度に海外で開催された国際会議の招待講演は 37 件である。
- ・科研費の平成 20 年度の採択状況も順調で、15 年度の 2 億 7 千万円より約 1 億 5 千万円以上増加している。
- ・科研費基盤 S が 2 件 (生体過酸化脂質の生成と制御に関する食品科学的研究、認知症における微小管重合調節異常と薬剤探索) 採択された。
- ・平成19年度から23年度までの予定で、文科省特別教育研究経費連携融合事業に有機性資源循環の課題が採択された。

特筆すべき社会貢献活動等

- ・本研究科教員は所属学会で会長や理事などの委員を務めるほか、公開講座・講演・小中学校への出前授業や部局への受入など、地域社会にも多大な貢献をしている。
- ・各省庁や公的機関の専門委員やプロジェクトの評価委員等を数多く務めており、なかでも JSPS 学術システム研究センターの専門研究員 (平成 15 - 17 年度) 同主任研究員 (平成 18 - 20 年度) や、科学技術・学術審議会専門委員 (平成 19 - 20 年度) 日本学術会議連携会員 (平成 17 年度 20 年度) などを輩出し、日本の学術研究推進にあたり大きな貢献をした。
- ・フィールド科学を実際に体験できる地域開放事業や、高校生対象の臨海実習・小学生対象の総合学習や海洋講座など、地域社会にも多大な貢献をしている。20 年度の実績は次のとおりである。

農水省委託事業「教育ファーム推進事業」8 回実施
フィールドセンター開放講座 2 回実施 (コンポスト関係)
臨海実習 1 回実施
鳴子小総合学習 4 回実施
近隣小学校、保育園等の体験学習 8 回実施
- ・SOI-ASIA に 8 名 (内オーガナイザ 2 名) が参画した。
- ・「科学者の卵 養成講座」への申請を進め、21 年度には 3 名の教員が講義を実施する。